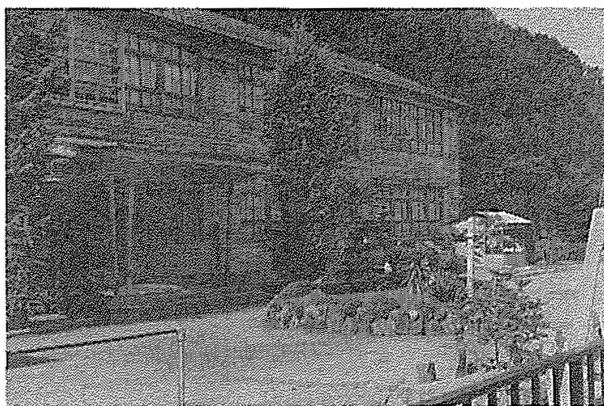


## 《現地報告》

# 農具の収集—その意義と問題点

堀尾尚志\*

1. 調査の端緒 15年ほど以前になろうか、新聞の片すみにあった記事を見て、京都府北部の山間にある小学校を訪ねた。校区の農家から提供された古い民具を整理して並べた展示室を、同校の開校記念日に合わせてオープンしようというのであった。過疎地の学校は教室が空いている。それを展示室に転用したのである。写真1～4は、その時のスナップである。着いたときは、すでに生徒達の見学も終りかけていた頃で、生徒達が足早に通り過ぎていったあとには、熱心にひとつずつ見てまわる老年の参観者だけが残った。



- 写真1 過疎になった小学校の空き教室が、民俗資料の展示場に転用されている。写真は京都府綾部市奥上林小学校。校区の各家が手持ちのものを供出し、ある秋の休日に開校記念行事の一環として展示場の開場式が行われた。

\*ほりお ひさし、神戸大学農学部

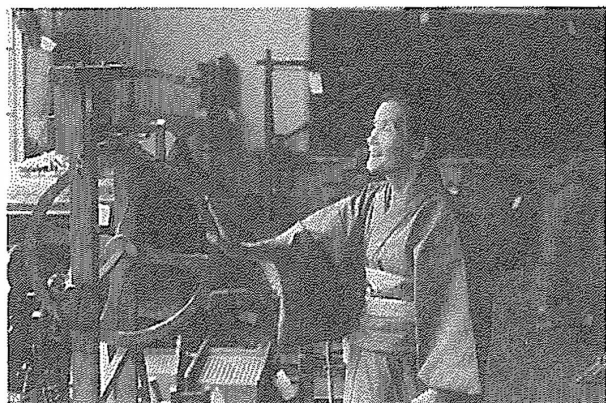


写真2 まゆの糸繰器の前で。生徒や若い先生達より、中年そして老年の人びとの方が熱心に見たり触ったりしていた。(同校)



写真3 展示物を手に取って、その使い方を説明する生徒の祖父。左はあぜ塗り作業、右はわらくつのはき方。なお、左図において柄と刃を結ぶように白くみえるものがあるが、これは資料番号の符票であって支柱ではない。(同校)

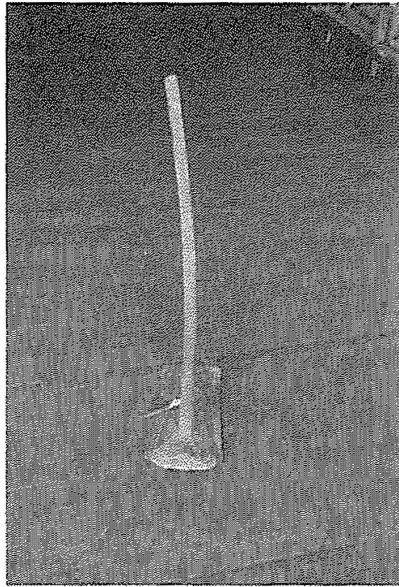


写真4 柄の曲った鎌。もとは直であったが、充分枯らさないうちに製品にしたため年月の経るを待たず乾燥して曲ったもの。いうまでもなく使いものにならない。『百姓伝記』（年代未詳）にも、このような粗悪品を買わないように注意せよと記されている。（同校）

展示室は3室あったと憶えているが、その半分が農具の展示にあてられていた。その校区で使われていた農具がほぼ全種類集められていると聞いた。それらは、その地域における農具の、またその揃え方の特性をほぼ示しているわけである。それ以来、農具を集めているという情報を得ると訪ねるようになった。昭和53年度文部省科学研究費の交付を受けて、兵庫県下における農具コレクションの現状調査をしたことがある。『博物館要覧』に記載されていないようなもの、博物館相当施設どころか、何なに資料館というような体をなしていないようなもの、さらにいえばただ農具を集めただけといったものの存在を探し出すことをも含め、その所蔵内訳や展示・運営方法を調べた。名が知られていないような小規模なところでは、その周辺だけで使われていたものが集められている場合が多い。いいかえれば、それぞれの地域の特性を収蔵品から把握することができるという期待がもてる。いまいうところの地域とは、一般的な地図

にはその名も記されていないような盆地であるとか谷筋を指している。あるいは、もう少し広くみて、村あるいは町の行政区域を指す場合も多い。

2. 農具を収集する資料館  
まず、農具の収集がなんらかの形で行われているところを洗い出すため、県下の全市町村教育委員会と農業改良普及所あてに問い合わせの手紙を出し、それぞれの管内において該当のものがあれば、たとえ不確かな情報であってもよいから知らせて欲しい旨を伝えた。その結果51件の情報を得たので、それぞれに20項目程度の予備調査カードを送り確認したところ、当時39か所で農具の収集がされていることが明らかになった。それらの設立年次と所蔵点数（農具のみ）をみてみよう（表1）。設立年次としては、なかに昭和20、30年代さらに

表1 兵庫県下における農具を収集する資料館等の数

1. 設立年次別						
年次	～40	41～45	46～50	51～	不明	計
件数	3	7	17	5	7	39
%	8	18	33	13	18	100

2. 所蔵点数別							
点数	～49	50～99	100～199	200～499	500～	不明	計
件数	13	8	4	4	1	9	39
%	33	21	10	10	3	22	100

は大正年代というのが各1か所ずつあるが、ほとんどが40年代それも後半に集中している。この時期に設立されたもののほとんどが共通した設立の経緯をもっている。40年代前半、社会科教育で地域学習が進められ、その関連で多くの民具が収集された。一方、周知のように農村部での過疎化が進み、多くの学校で空き教室が増えたが、これが収集した民具の収蔵庫に、そして展示場となったのである。兵庫県村岡町のように、校舎1棟をそっくり民俗資料館として活用したようなところも少なくない。同県猪名川町では、高等学校の統合により廃校となった旧校舎を活用して、同町の社会教育センターの1部として民俗資料館の看板をかけたところもある。収蔵点数についてみれば、2000点に達するところが1か所あったが、約半数が100点未満であった。これらのうちの

多くは、前に述べたような契機に集められたもので、収集がそのときだけに終わっている。それに対して、100点あるいは200点を越えるところでは継続的に収集が進められてきており、資料館とか博物館としての存在への志向がもたれているところである。なお、両表において不明とあるのは、回答がなかったものと、調べていないのでわからないというものを合わせた数である。39か所のうちで収蔵目録とかカードをつくって管理しているところは8か所しかない。他のところは、とにかく行ってみなければ何があるのか分らない。無論、目録の写しを送ってもらったところで現物と現地をみないことにはなんの意味もない。予備調査の結果をたよりに本務の合間をみては車をとばして見て回りだして10年余が過ぎた。

年月が経ただけで、なんのまとまった報告も書けないでいるが、兵庫県を中心とした農具収蔵の現場報告として、中床犁と二挺掛をとしてみた各地域における農具収蔵の意義、そして農具の収集・展示について考えてみたい。

3. 中床犁を 中床犁は、短床犁の反転性と機能性のある程度もちつつ幅広い犁床による床使った地域 締め効果を合わせもった型の犁である。北九州では比較的早くから使われていたようで、『福岡県農務誌附図』（明治14、1881）<sup>1)</sup>には無床犁（抱持立犁）、原始的な短床犁そして一般的な長床犁と合わせ記されている。一方、その他の地

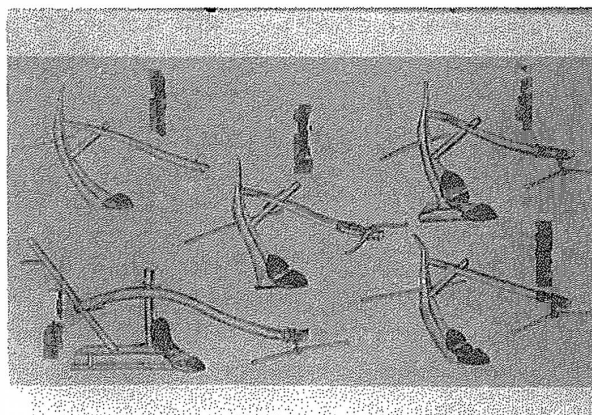


写真5 「福岡県農務誌附図」より

1) 西日本文化協会編「福岡県史」、近代史料編農務誌漁業誌、福岡県、1982、所収。

域では、近代短床犁の普及と平行して、あるいはその後に普及したものと考えられている。中床犁が選択的に導入された主な理由のひとつは、上に述べた床締め機能をもっていることと、いまひとつは価格が短床犁の約半分であったということである。短床犁は、深耕・反転性を充分確保しつつ1頭牽きの範囲内に牽引抵抗をおさえるため、力のバランスを進行方向と直角な方向に傾けた平面でとっている。そのため短床犁の設計・製造にはかなり高度な技術の蓄積が必要であった。そのため製造元も限られ価格も高かった。中床犁の方は、犁床を幅広く長くっており、反転による側方力を犁床側面の反力でバランスをとれることもあって製作は比較的容易である。各地で製造されていて、価格も低かったのである。

初めに述べた上林小学校の収蔵品のなかにも中床犁がいくつかみられた。參觀に来ていた老人は次のように語った。大正年間から昭和初期にかけてのころは、地元で造られていた中床犁の価格は短床犁のその約半分であった。短床犁の方が深耕ができて良いのはわかっていたが、資力がなくやむをえず中床犁を使っていた。そして、短床犁の価格が相対的に低くなっていくとともに、この地方にも普及したという。

篠山盆地の南口にあたる古市の近くの谷筋へ出かけたことがある。納屋をつぶすから古い農具を引き取ってくれないかという連絡を受けたからである。その家の納屋には短床犁がなかった。その谷筋では、動力耕うん機が普及するまで中床犁が使われていたという。水田の床締めのため、短床犁でなくあえてこれが使われていたのである。床締めのために中床犁がひろく使われていたことはすでに指摘されているところである<sup>2)</sup>。この機能ゆえに中床犁が選択的に使われていた地域と、機能とは関係のない理由で使われていた地域があったのである。

- 4.二挺掛け 二挺掛けは、幕末畿内の綿作地で発明された、2条の播種溝を同時にきっての分布 いく用具である。大蔵永常『農具便利論』(文政5, 1822)<sup>3)</sup>には、すでに十分完成された型態のものが記されている。当時の畿内綿作地帯では、ワタの裏作としてムギが作付けられていたが、ワタの収穫期とムギの播種期が重なるため、ワタの条間にムギを播かねばならなかった。ところが労賃の高騰のためや

2) たとえば、嵐嘉一『犁耕の発達史』, 農山漁村文化協会, 1977。

3) 『日本農書全集』第15巻, 農山漁村文化協会, 1977, 所収。

むなく最後の薊花を残したまま株ごと引き抜いて軒先につるしていた。ところがこの二挺掛の発明により、それまでの手おの鉄による作業に比べ作業能率が飛躍的に上がったため、ワタを途中で引抜くことなく完熟したものを収穫できるようになった。そうした事情のなかで発明された二挺掛は、畿内、播州平野の綿作地帯に普及した。

明治23年、兵庫県は「兵庫県農具図解」<sup>4)</sup>を編纂した。県下の先進地2か所、後進地2か所そして中間地帯1か所の計5か所において当時使われていた農具を、それぞれの地域ごとに分けて図解したものである。この中にも二挺掛がみられるが、それは武庫・菟原郡（現西宮・芦屋両市と神戸市の一部）と加古郡（現加古川市と高砂市の一部）の巻においてであり、他の3郡（養父、但馬、津名＝淡路島の北半分）にはみられない。いうまでもなく前の2郡は綿作の盛んな地域であった。

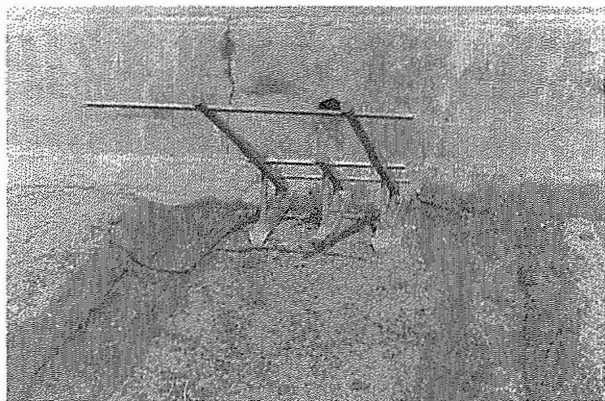


写真6 「二挺掛」ならぬ「三挺掛」というべきか。ネギの苗を植えるのに使っていた。（西宮市にて）

さて、現在県下各地の農具コレクションのなかにそれを見出しうるのは、かつて綿作が盛んであった地域ばかりでなく、摂津や播磨の平野部と早くから経済的なつながりがふかかった地域でもそうである。大阪平野の池田から猪名川ぞいに上ったところの猪名川町、加古川上流の滝野町や三木市などである。経済的なつながりにのって伝播したものと思われるが、綿作があっても平野部

4) 『明治農書全集』第11巻、農山漁村文化協会、1985、所収。

ほど商品作物として展開してはなかった地域でも使われていたのである。ところで、二挺掛の使用がすなわち綿作の存在とはいえない。明治中期以降、日本の綿作が衰退したあとも、畑作一般の播種用具として使われてきた。現在でも一部ではあるが大阪平野の近郊野菜作地で使われており、筆者もそれを見て、インタビューしたことがある。山間部においては、二挺掛が綿作の用具と



写真7 移築した民家の軒先にて。幕末建造の農家を、社会教育センターの敷地内に移築して民具の展示場としている。(宝塚市同センターにて、佐藤尚一氏撮影)



写真8 大阪府北部のある小学校にて、1982年頃の秋。社会科の授業風景。千歯扱、足踏型回転脱穀機そしてコンバインを並べての実演・実習。説明をしているのは校区で農業を営む父兄。(藤代衛氏提供)



してでなく、畑作一般の用具として、おそらく使われていたのではないかと思われる。すなわち、中床犁が使われていたからといって、その地域が必ずしも水持ちが悪かったことにはならないし、二挺掛が使われていればそこではかつて綿作が盛んであったことにはならないのである。

ここで述べた中床犁の場合は、いわば開発途上国でいまよく唱えられているアプロプリエートな技術として選択されていたわけであり、二挺掛の場合は本来綿作が展開するなかで発明されたものであったが、畑作における優れた機能が積極的に利用されたわけである。

5. 農具収集の意義
- 地域における小さな収集は、そうしたことを伝えてくれる。また、もしそれぞれの地域における農家での一揃いの農具が収集されていたなら、そこから多くのことを分析できよう。立派な建物の博物館が縦断的に各地の農具を集めるのだけが、農具の収集ではない。しかし、各地域の資料館では、せっかく収集しても、展示室を管理し運営していくための予算的な裏付けがないのに泣いている。そうしたなかで、地域のコミュニティー・センターをつくる時、共有している地域意識の具象的なよりどころとして農具・民具の収集を位置づけ成功した例があることを紹介して本稿を終えたい。